

### —退職にあたって—

## 常盤台での30数年 つかの間の夢か幻か

元応用化学学科教授 山本 修一

### はじめに

何にでも“平成最後の”という冠をつける風潮であるが、それを借用すれば“平成最後の定年退職教員”となる。元号についての思い入れはないが、昭和に勤務を開始し、平成とともに退職したことになる。私の在職した30数年は大学が大きく変動したこともまちがない。勤務先は同じであるが、自分史的には、以下の4つの時代に分けられる。

- (1) 1981-1994 化学工学科
- (2) 1994-2001 応用化学工学科
- (3) 2001-2017 医学系研究科応用医工学専攻/  
応用分子生命科学系専攻
- (4) 2014-2018 生命医工学センター/工学部図書館長

### (1) 1981-1994 化学工学科

1981年、はじめて宇部に来たときは、既に山陽新幹線は全線開通していた（1975年全線開通。ただし、当時はJRではなく国鉄）。宇部線は、現在と同様であるが、有人駅も多かったと思う。東新川駅も有人駅で、売店も存在していた。もちろん、コンビニエンスストアはなく、夜の買い物は不可能であった。名古屋の中心地で生まれ育ち、京都に行ったときですら、中心街が小さいのに驚いたくらいなので、宇部は、まさに別世界「カルチャーショック」であった。

化学工学科助手として着任した当時、工学部は7学科で学生定員は約

300名、教員数も100名以下であった（と思う）。現在の会議棟はなく、本館2階の会議室で開催されていた教授会で着任のあいさつをしたことを覚えている。国家公務員として採用されたので、“サービスの宣誓”に署名した。後年、国家公務員はパスポート取得のみならず私的旅行にも学長の許可がいることを知った。実際に最初のパスポート取得は学長の許可証持参で、現在の県庁ではない古い建物に申請に行ったことを記憶している。

化学工学科は学生定員40名で、教員と研究室は、すべて4階建ての化学工学棟（現在は環境共生系専攻棟）にあった。修士の学生も毎年10名程度であり、卒論生と修士の学生と教員はお互いの顔も名前も知っていた。スマホ・ケータイどころか、下宿に電話すらなく、ようやく研究室に1台程度PCが導入された時代であり、大学の電話もダイヤルインではなく交換手がいたので、それほどかかってこなかったし、かけることもなかったように思う。インターネット（学内LANの設置は90年



工学部で開催された学会にて（大学院生と）

代)もなく、海外とのやりとりはFAXであったが、1989年には海外に発信できるFAXは工学部事務室に1台設置されていただけで、それもダイヤルインではなく交換を通してであった(浦島太郎のような話ですが、本当のことです)。当然のことながら、学生も教員も時間はたっぷりあり、ペンとノートで毎日何か考えごとをしていた。当時の学生は、このような貧相な環境で卒論・修論に従事していたが、現在は、一流企業の部長クラスになっており、感無量である。

## (2) 1994-2001 応用化学工学科

学生時代は、全国の大学の組織をよく知らず、山口大学に博士課程(博士後期課程)がないことは着任してはじめて気がついた。1990年頃から、多くの大学が博士課程設置を目指し、山口大学工学部は1990年に工学研究科に博士課程が設置された。同時に学科も改組され、化学工学科は工業化学科とともに学生定員90名の大きな応用化学工学科になった。また夜間に開講されていた工業短期大学部は廃止され、工学部の夜間主コースが開設された。いきなり100名規模の授業になり、特に18歳人口増に対応して臨時増募をしていたときは教室の学生は130名を超えることもあった。雰囲気も全く異なり、対応に苦慮した。大学科になったことにより、教員と学生との距離が遠くなり、学生同士もお互いに知らないまま卒業していく事例も増えた。また、女子学生さらには女性の大学院生が増えたのも特徴的である。化学工学科時代は、女子の大学院生は、最後の年度を除いてゼロであったと記憶している。

## (3) 2001-2017 医学系研究科応用医工学系専攻/応用分子生命科学系専攻

博士課程が設置された後に、医工連携を目的とし、応用医工学系専攻が医学系研究科に

設置された。はじめての医工連携のための専攻であり、毎月医学部で開催された会議では、新たな知識と文化(?)を知るようになった。また、2004年に大学は法人化され、公務員ではなく法人の職員として働くことになり、労働安全を遵守することが求められるようになった。2003年に完成した総合研究棟に研究室を移動したが、労働安全衛生法に準拠した設計になっており、企業の研究室と比較してもそんな色なく、外部からの訪問者あるいは新入生に進んで見学してもらうことができるようになった。

一方、大学自体も授業評価や教員自己評価等さまざまな評価を毎年実施することになり、教員は多忙で、“評価疲れ”になった。この間、学生委員、入試委員長、教務委員長等を歴任し、学部運営に関与することになり、私自身も疲弊した。2005年頃から、管理・運営業務の負担を減らすことができるとともに、比較的大型の研究費を得たこともあり、研究に注力できるようになった。

## (4) 2014-2018 生命医工学センター/工学部図書館長

2016年の大学院改組により、医学系研究科の2専攻は廃止され、新設された創成科学研究科のライフサイエンス系専攻に所属することになり、創設から3年間、応用分子生命系専攻と兼任で専攻長(代表)を務めた。医工連携の組織がなくなることへの危機感があり、2013年に大学から募集があった“新呼び水プロジェクト”に、医工連携の研究・教育組織、生命医工学センターを応募したところ、採択され活動を開始した。同時期、2013年からは毎年20~30億円規模の予算で運営する大型国家プロジェクト「次世代バイオ医薬品製造技術組合」に参画し、多くの企業研究者と協力してGMP施設で開発した技術の実証に

携わることができた（現在も継続中である）。

管理業務としては、工学部図書館長を長期にわたって務めることになった。学術雑誌の安定的な提供は研究にとって大変重要であることを再認識したが、大学の予算が縮小することにより、電子ジャーナル購読を継続することが難しくなってきた。3大パッケージのうち、Springerの購読を中止せざるを得なくなったことは残念なことであった。

## おわりに

30数年も文章にしてみると、3,000字で終わってしまう。気持ちとしては、つかの間の夢が幻である。この間に研究室に所属した学生は180名を超える。社会人学生18名を含む博士後期課程学生23名を引き受けた。海外からの留学生、招へい研究者は、オーストリア、オランダ、スロベニア、ドイツ、ポルトガル、トルコ、米国、韓国、台湾、マレーシア、インドネシア、ベトナム、タイ、イラン、イン

ドなどから20名を超えた。研究に関連して定期的に会う卒業生もいるが、全く会う機会がない卒業生のほうが多い。みんな元気で活躍していると信じている。

（追記）

本原稿の校正をしているときに、私が最初に指導した社会人博士課程学生の石原 尚氏（2001年博士取得）が51歳という若さで6月4日に急逝されたという連絡がありました。たいへん残念です。ご冥福をお祈りいたします。

## 謝辞

学生のみなさんには、研究で貢献してもらい感謝しております。おかげで化学工学会および日本食品工学会の二つの学会から学会賞と研究賞をいただくことができました。

最後になりましたが、常盤工業会には、特に外国からの訪問者の宿泊で毎年お世話になっています。ここに記して感謝の意を表します。

## 教員の異動

### 【定年退職】（平成31年3月31日付）

山本 修一（応用化学科教授）

中園 真人（感性デザイン工学科教授）

### 【転出】（平成31年3月31日付辞職）

木戸 尚治（知能情報工学科教授）  
大阪大学医学系研究科

### 【転出】（平成31年3月31日付任期満了）

田島 啓司（社会建設工学科助教）  
エムエムブリッジ株式会社

三宅 秀明（応用化学科助教(特命)）  
株式会社クヤマ

乾 隆帝（社会建設工学科助教(特命)）  
福岡工業大学

小室 隆（社会建設工学科助教(特命)）  
国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術  
研究所

垣花百合子（循環環境工学科助教(特命)）  
山口大学大学院創成科学研究科 学術研  
究員

Gilmour Graeme John  
（工学教育センター助教(特命)）

Costa Luis  
（工学教育センター助教(特命)）